

## 令和 5 年度 学校評価報告書（総表）

1 学校の概要			
学校名	筑波大学附属中学校	校長名	水上 勝義
幼児・児童・生徒数（R6.3.1現在）	610	学級数	15
2 教育目標等			
① 学校教育目標	調和的な心身の発達と確かな知性の育成、ならびに豊かな個性の伸長を図るとともに、民主的社会の一員として人生を主体的に開拓し、進んでは、人類社会の進展に寄与することができる人間を育成する。		
② 学校経営方針	本校は教科教育の伝統を受け継ぎながら、筑波大学の附属学校としての先導的教育拠点、教師教育拠点、そして国際教育拠点という役割を果たすとともに、すべての教育研究は「教育課程研究に帰一集中する」という本校の伝統的な考え方にもとづきながら、教科教育はもとより、総合学習や学校行事、特別活動など教科外教育の研究・実践にも取り組むことで、学校目標の実現を目指す。教育研究においては、現代的な教育課題（教育の ICT 化等）に応えるべき研究課題を設定し、教育内容・方法の側面より研究を行う。また生徒の健康と安全の確保に留意し、必要な対策を講じていく。		
③ 重点目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 将来構想委員会を中心にしながら本校の将来構想を検討し、小中高との連携を進めていく。</li> <li>2. GIGA スクール構想の理念に沿った、ICT 機器を用いた授業実践を、積極的に開発し、発信していく。</li> <li>3. 本校の教育研究・教育実践を外部に発表していく。</li> <li>4. オリパラ教育について継続研究し、グローバル人材の育成に資するカリキュラムを開発する。</li> <li>5. 他大学・附属学校との連携を推進する。</li> <li>6. 働き方改革に向けて、トラブルの発生を未然に防ぐためのしくみを整える。</li> </ol>		
④ 前年度（令和 4 年度）の成果と課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 将来構想についての意識の涵養に努めた。学校間の交流は、感染防止のため十分には行えなかった。</li> <li>2. 各教科における学習指導の実践研究を推進し、研究協議会・各教科の研究會・研究紀要等で発信した。対面授業における ICT 活用を積極的に進め、その成果を蓄積・発信した。出席停止者に対するオンライン授業を実施し、教員だけでなく受け手である生徒の技能を向上させることができた。校内ネットワークや教員用機器を整備し、情報セキュリティシステムを整えた。</li> <li>3. より先導的な教育実践を行うべくグローバル人材育成カリキュラムの研究を行った。Web サイトの更新等を積極的に行うとともに、本校の教育実践の対面での広報活動を充実させた。</li> <li>4. 大学や他附属と連携しながら、オリパラ教育の推進を図った。次回オリンピック・パラリンピックに向けて海外との学校間交流を始めた。</li> <li>5. お茶の水女子大学附属学校の提携校進学は、小中の第 6 回目を、中高の第 5 回目を実施した。</li> <li>6. 保健室との情報共有や、教員間の連携を進めるため、健康管理アプリや情報共有アプリでの情報共有を進めた。支援が必要な生徒の情報共有システムを整えた。</li> </ol>		

### 3 重点目標達成についての総括的評価

1. 将来構想については、校内教員に対して学校の置かれている状況などについて意識を高めるよう説明場面を多く設けたが、学校全体としての意識の高揚までは至らなかった。将来構想委員会を中心にしながら本校の将来構想の検討場面を設定し、小中高と連携して話し合いの機会を設けた。
2. ICT機器を用いた授業実践や指導法について、各教科で研究しながら多くの実践が行われ、学外からの参観者に対して授業参観を通して説明・発信した。一方、教育環境や指導法の変化に伴う課題も見え始めてきた。
3. 本校の教育研究・教育実践については、研究協議会を対面実施し外部に発表することができた。また、各教科ごとに成果の報告・発表を行った。
4. オリパラ教育については、継続的に教育活動の中に位置づけられるよう工夫した。2名の講師を招聘し、学年ごとに授業方法を変えながら、実践した。
5. 他大学については、教科ごとに授業研究やアンケート調査の協力を行い、その成果を発表したり、協力したりした。他附属とは、委員会や生徒会などの連携を行い、情報交換会や交流会を行った。
6. 働き方改革については、学校全体としての考えの共有や改善案の提案など具体的な変更には至らなかった。一方、校内で発生するトラブルなどについては、情報共有を行うためのシステムを整えたり、講師を招聘して研修会などを行い、トラブルを未然に防ぐためのしくみを検討した。

### 4 令和6年度の学校課題

1. 本校の将来構想についての具体的な案を策定する。
2. 本校の特色を生かした教育課程のあり方についての研究を、学校全体として取り組んでいく。
3. 学校全体の教育活動の見直しや整理を行いながら、働き方改革を具体的に進めていく。

### 5 学校課題に向けての具体的な取り組み

1. 教員同士での話し合いや検討をしていく研修会の場面を、教員研究会の中に設定し、本校の教育活動の自己点検・見直しに向けた話し合いを増やしていく。
2. 教育課程特例校制度や研究開発学校制度などを活用し、学校全体として教育課程研究を行っていく体制を強化する。
3. 学校全体の教育活動の見直しや整理として、学校行事、学年行事、生徒会行事などのあり方について、また、部活動の体制について検討・研究していく。

### 6 成果物一覧（出版物・紀要・書籍等）

- ・筑波大学附属中学校研究紀要 第75号
- ・教育課程研究（研究資料 58号）
- ・第51回研究協議会発表要項
- ・筑波大学附属中学校 教育課程研究所 所報73号
- ・中学校各教科教科書・指導書

# 学校評価（自己評価）報告書（項目別表）

令和5年度

学校名

筑波大学附属中学校

項番	評価項目	具体的評価結果
1-1-4	個別指導やグループ別指導、習熟度に応じた指導、児童生徒の興味・関心等に応じた課題学習、補足的な学習や発展的な学習などの個に応じた指導の方法等の状況	各教科において、学習活動の工夫を行い、個に応じた指導法の研究を行った。ICTを活用して、個別・グループ指導の可能性が増し、生徒個人からの質問や補充などの対応ができるようになってきている。年に数度設定されている担任および教科面談も例年通り行った。
1-1-7	コンピュータや情報通信ネットワークを効果的に活用した授業の状況	1人1台のコンピュータ端末の利用が、どの教科も毎時間のように行われている。授業ばかりでなく、学級・学年活動、生徒会活動などにも利用されていた。
1-2-5	体験活動、学校行事などの管理・実施体制の状況	教科や学年、生徒会指導などで組織をつくり、企画・計画について事前に確認を行ったり、生徒の委員会を組織し、多角的に点検チェックできるようにしている。実施に当たっては、教員や補助員を十分に当てるようにし、野外、校外においては情報交換や速やかな連絡ができるよう通信機器などを利用する体制を整えた。
2-1-1	学校の教職員全体として組織的に進路指導に取り組む体制の整備の状況	HR・進路委員会を組織し、各学年間の情報共有や前年度の引継ぎを行った。また、学年指導を原則にし、個々の担任によって指導の差が出ないようにしている。
3-1-2	問題行動への対処の状況	校内・校外で起こる問題行動に対して、その発生原因を的確に把握し、対応のしくみを整えるとともに、予防につながる活動を進めていくために、SCやSSWなどの関りを深め、情報共有を図りながら、生徒の指導に生かすようにした。また、子ども家庭支援センターや児童相談所などと協力体制を図った。個人の抱える問題については指導の効果は見られたが、家庭に主な原因がある場合は、顕著な改善には至らなかった。
3-1-6	児童生徒の出席率及び遅刻の状況	不登校生徒がコロナ前と比して激増しており、これ以上の増加を防ぎ、減少へとつなげるために、生徒の心身不調を早期発見し、きめ細かい支援体制を整える努力をした。具体的には、保護者からの毎日の出欠席の報告に、保護者からのコメントを加えたものを教員間で共有したり、支援員委員会から支援が必要な生徒の情報、担任からの共有すべき内容を集約できる体制を作った。生徒の欠席数の大幅な減少にはつながらなかったが、本人や家庭の状況などの共有はできるようになった。
3-2-4	豊かな人間関係づくりに向けた指導の状況	保護者からの毎日の健康状況の報告を継続し、毎朝の担任による健康観察を行い、その結果を集約している。生徒による保健委員会を組織し、教員から保健委員への指導のもと、日々の健康管理や疾病、事故・けが予防など、生徒の自己健康管理向上に貢献している。

10-1-5	学校便りや学級便りの発行など、主として保護者を対象とした情報の提供状況	保護者へは、学年通信や Web サイトなどを活用し、定期的に情報を共有するようにしている。保護者会や授業参観の機会を増やし、生徒の学校での様子がわかるように工夫している。地域からの情報提供は、必要に応じて、生徒・保護者へ報告・指導を行っている。
--------	-------------------------------------	--